

第19回「人に優しい地域の宿づくり賞」受賞者紹介

リクルートライフスタイル「じゃらん」賞

南三陸ホテル観洋

『震災を風化させないための語り部バス』を中心とした地域経済の活性化、震災復興の取り組み

東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県の南三陸町。町の全機能が麻痺するなか、自社も被災しながら、避難所として被災者を受け入れた南三陸ホテル観洋が震災から5年経とうという現在も活動を続けている。「震災を風化させない語り部」事業がその活動であり、それは雇用の創出、地域経済の活性化や人材育成、震災復興への取り組みでもあった。

震災から間もない2011年9月、同館は被災物が撤去されたものの信号も標識もない道路で町内ガイドの取り組みを始めた。ホテル内の会議室で行う「講話」とお客が乗ってきたバスに同乗しての活動で、同館では町民へ「語り部ガイド」を依頼した。それは、震災により職や生きがいを失った町民にとっては、やりがいのある仕事だったに違いない。

やがて2012年2月には、ホテル所有のバスによる「震災を風化させないための語り部バス」の運行を開始した。南三陸を訪れただけでは震災当時どのような被害があったかを知ることは難しいのが現状。だからこそ被害者自ら被災地を案内し、写真や身振りを交えながら当時と現状を伝える「語り部」が必要であるとの信念は強かった。外国人観光客には英文対応タブレットを使用しているの対応もあり、2016年3月現在、「語り部バス」の体験人数は累計約30万人にも上る。2016年3月には「全国被害地語り部シンポジウムin東北」も開催され、日本各地の語り部との交流も行われ、連携を強めることもできた。

復興工事が進む南三陸町であるが、同館では震災遺構の保存にも努め、津波の押し寄せるなか、避難した327人の命を救った「高野会館」を自費で保存することを決めている。語り部事業はこれからも、防災意識向上と記憶の継承、子どもの学習支援、そして観光事業による交流の増加を目指しながら、大震災からの復興への取り組みとして実体験・教訓を伝えていく。



語り部バス車内の様子



バスを降りてご案内することもある



タブレットにより外国人向けガイドも可能となった

2012年1月時点の高野会館の様子



楽天トラベル賞

月岡温泉 摩周

「地元出身の抒情画家・詩人『落谷虹児(ふきやこうじ)』の描いた浴衣を復刻 貸浴衣で温泉街再興プロジェクト」

新潟県の月岡温泉 摩周では、地元新発田(しばた)市出身の挿絵画家・詩人の「落谷虹児」の描いた浴衣をオマージュとして再現し、宿泊客に浴衣を貸し出して地域の文化を感じてもらおうと同時に、街歩きを楽しんでもらうことで、疲弊していく温泉街に元気を取り戻す街おこしプロジェクトを行っている。

落谷虹児は大正から昭和にかけて、詩的かつモダンで洗練された美女を描き、当時の少女たちを魅了した画家(「落谷虹児記念館」は月岡温泉から車で15分)。浴衣は虹児の描いた当時の雰囲気を感じることができるようにと大正時代から伝わる「注染(ちゅうせん)」で染め上げ、すべて手縫いで仕立てた。それは大量生産の既製品とは異なり、身体を優しく包み込み、上質な着心地を楽しめるものだ。こうした企画は、プロジェクトに共感してもらった不特定多数の多くの人から支援を得るというクラウドファンディングを用いて資金調達ができたことで実現が可能となった。

今回、月岡温泉 摩周が作ったのは「孔雀」、「梅」、「葡萄」、「創作花」の柄を取り入れた4種類の浴衣と子ども用の浴衣。1着1000円で貸し出しているが、内500円はリネン費。もう500円はプロジェクトに協力してくれた饅頭屋や土産物屋など地元の30超の店舗で使える金券として配布するという仕組みにした。

浴衣の貸し出しは2015年5月下旬から開始し、半年強で約250件となったが、何よりも地域の皆さんから「あの浴衣で町を歩いてくれると、町が華やかになって嬉しい」の声も多く寄せられ、月岡温泉 摩周にとって大きな励みとなっている。同館では「本プロジェクトはとても小さな取り組みだが、地域の皆さんと一緒にやり、継続的に行っていく仕組みとなり、5年後、10年後には、地域に根付き月岡温泉の名物になるようにしていきたい」と語っている。



実際の浴衣を来たモデルの女性達はクラウドファンディングのサポーター



落谷虹児の作品